

「平和ではなく剣を」という小標題が掲げられます。この小標題だけを見てみると本日の箇所がキリスト教的ではないと考え込んでしまうかも知れません。わたしたちが慣れ親しんだ平和をもたらす福音の質に反するように思えるからです。

ここで留意しなければならないのは、この箇所が1節から始まった派遣行為とそれに伴う苛酷な迫害の状況下で編集されたものであるという点です。当初の意欲に満ちた派遣への情熱は、いつしか迫害という理由で色褪せて後退を余儀なくされて行くのです。初代教会は岐路に立たされます。弱く・小さく・貧しい者と共に生きることが初代教会のアイデンティティーでした。それが欠落すればもはや教会ではないのです。そのためには常に宣べ伝えるという活動が必要だったのです。ところがそんな活動にも迫害というプレッシャーがかかります。途中、皇帝ネロによる激しい迫害の時期も経験しました。おそらく多くの者が殉教したり教会から去って行ったのでしょう。マタイはそんな事態を鑑みて「逃げて行きなさい」(23)とまで勧告しています。そして、26節から本日の箇所に至っては「逃げてもいいが、信仰を捨ててはいけない」という内容を添えて伝道者たちの内面に向かって働きかけるのです。

本日の箇所は以下に分けられます。

- ①イエスの到来によって引き起こされる事態(34-36)。
- ②イエスにふさわしい者のとるべき道 (37-38)。
- ③イエスのために失うこと(39)。

まず①の到来と事態とは「わたしが来た」(34)というマタイのオリジナルな慣用句を以て「わたし」、つまり「イエス」と「メシア」は同義語であると主張し、続けて「…と思ってはならない」を導入して当時の通俗的メシア観を否定してイエスの独自性を強調します。そして35-36節に旧約のミカ書7:6を引用して、平和と剣のテーマは旧約の昔から正しい信仰者に襲いかかるジレンマとして採用します。つまり、マタイは②で「ふさわしくない」を三回も用いて平和と剣を、日常的な信仰と家族に置き換えて繰り返し記します。③では「得る」と「失う」の対比です。

以上のどれもが一見すると180度異なるかに思える事柄に描かれます。しかし、実はそれらは繋がっているのです。

それは「逃げても良いが、信仰を捨ててはいけない」という矛盾した内実への提案なのです。二者択一の迫りは人を窒息状態に追いやります。そうではなく、マタイは終末論的な描き方で「信仰の質」を記して行くのです。

ひょっとしたらわたしたちは完成などということをして人生に求めて来たのかも知れません。完成とは目標に達したり、条件を満たすことでしょう。けれども振り返ってみますと完成・厳密・徹底などを求めることがどれほど人生を不自由なものへと混乱させてきたかと思うのです。不十分・不徹底・不正確等々、総じてそのような曖昧さがわたしたちの生きる側の事実なのでしょう。その曖昧さに耐えて、ただ希望を失わずに何とか生きることを放棄しないならば、人生はそのことだけで完全なのです。

マタイは、逃げ出すことが信仰を捨てることではないと派遣された者たちに慰めと励ましを語るのです。そして、このことこそ「自分の十字架を担う」とだと語るのです。